

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学



要覧 2000

目 次

概 要

歴史と性格	1
研究組織	3
研究組織構成	4
所 員	6
運営委員・専門委員	7
卓越した研究拠点 (COE)	8
情報資源利用研究センター	9
歳 出	11

研究活動

共同研究プロジェクト	12
国際学术交流	24
長期研究者派遣	27
短期共同研究員(公募)・大学院・研究生	28
言語研修	29

施 設

電算機室・情報資源利用研究センター	30
図 書 室	31
音声学実験室	32

表紙写真説明

朝食を届けに

正月も終わり降雨が本格化すると共に、耕起・田植え・播種・田植えと水田での作業が目白押し。村から遠くに水田のある人は出作り小屋で寝起きするようになり、村の近くに水田のある人でさえ辺りの明るくなる六時前にはもう朝食もとらずに仕事に出て行く。朝食は後から、子供達や奥さんたちが、籠に入れたり洗面器に入れりして水田まで届けに行く。湯気の上がるような炊き立ての山盛りのご飯、それに豆の煮込みか葉野菜のスープのおかずが一品。朝食が終われば夏の陽射しの中、昼食までさてもう一仕事。雨さえたっぷり降ってくれば、7月には新米が食卓にのぼるだろう。

(マダガスカルのマジュンガ州北部にて。
1985年1月。 深澤秀夫)

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、我が国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命は、共同研究を推進するとともに、全国の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、研究交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

戦後の復興が進むなかで、日本の運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、1961(昭和 36)年に日本学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するように勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964(昭和 39)年 4 月 1 日、本研究所は東京外国語大学附置の全国共同利用研究所として発足しました。本研究所の設置目的は、次のようにまとめられています。

- 1)アジア・アフリカの諸言語の研究、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること
- 2)それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典をつくること
- 3)それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること

以来、30 年以上を経過して、本研究所を取り巻く諸事情は大きく変わりました。学界では、人文・社会科学の分野で、言語学・歴史学・人類学などのような、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究分野をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まってきました。それは近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化、および、狭い地域的枠組みにとらわれない広域な視野からの研究の必要性に対する認識の深まりなどに関連しています。他方、最近における情報処理技術の発達なかで、文字のみならず音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなくひとつの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきています。

このような学問的・社会的要請、アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化、科学技術の発達に対応して、本研究所は 1991(平成 3)年度に、研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の 16 小部門・1 客員部門(外国人)を、4 大研究部門・1 客員部門(外国人)に再編成しました。4 大研究部門では、言語を媒介として成立している文化を総合的に研

究する学問である「言語文化学」理論の構築，広域的なフィールドワークや共同研究の実施，情報の統合的処理のための理論と方法の開発などをめざしています。

また，東京外国語大学に1992（平成4）年度に新たに設置された大学院地域文化研究科博士後期課程を全面的にバックアップするために，多くの教官が参加し，教育活動にも力を注ぎはじめています。1995（平成7）年度からは，卓越した研究拠点（COE）の形成にかかわる「中核的研究機関支援プログラム」が発足したのに伴い，本研究所はその対象機関に指名され，従来にもまして，アジア・アフリカ地域の言語文化研究において先導的役割を果たすことになりました。

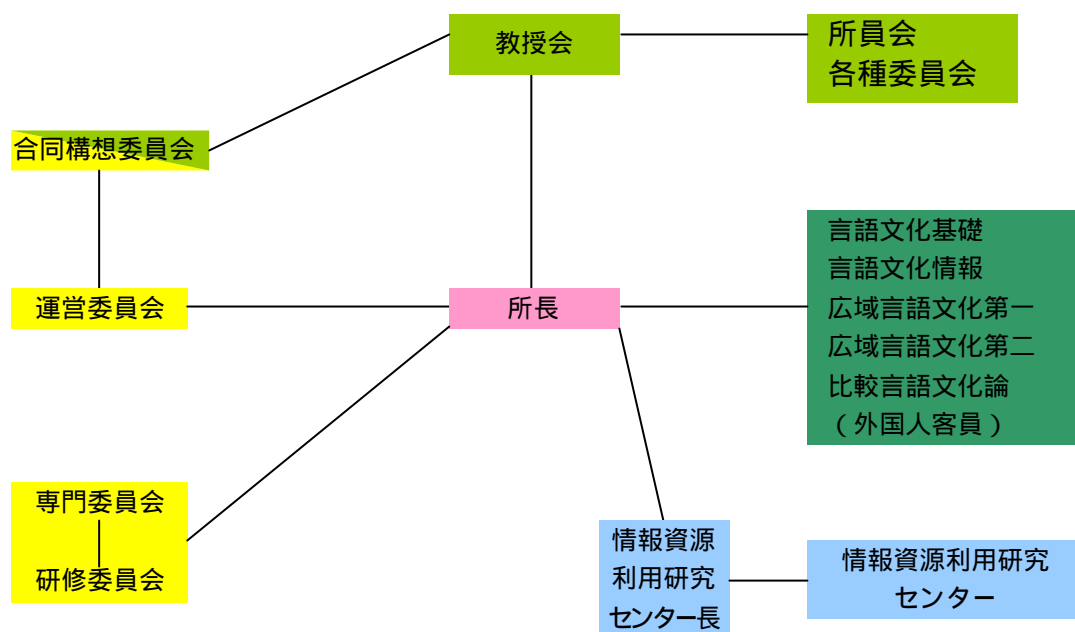
さらに冷戦構造崩壊後の流動する世界情勢と情報ネットワーク化のめざましい技術革新にすみやかに対応するため，1997（平成9）年度より附属「情報資源利用研究センター」を設置し，共同利用研究所としてのさらなる発展をめざしています。

以上の活動を充実させ，我が国における言語文化研究の発展に貢献することが，本研究所の責務であり，所員一同の願いでもあります。

歴代所長

岡 正雄	1964-1972 年
徳永康元	1972-1974 年
北村 甫	1974-1983 年
梅田博之	1983-1989 年
山口昌男	1989-1991 年
上岡弘二	1991-1995 年
池端雪浦	1995-1997 年
石井 溥	1997 年-現在

研究組織



(2000年4月1日現在)

区分	教授	助教授	講師	助手	計
定員	(5) 19	18	0	6	(5) 43

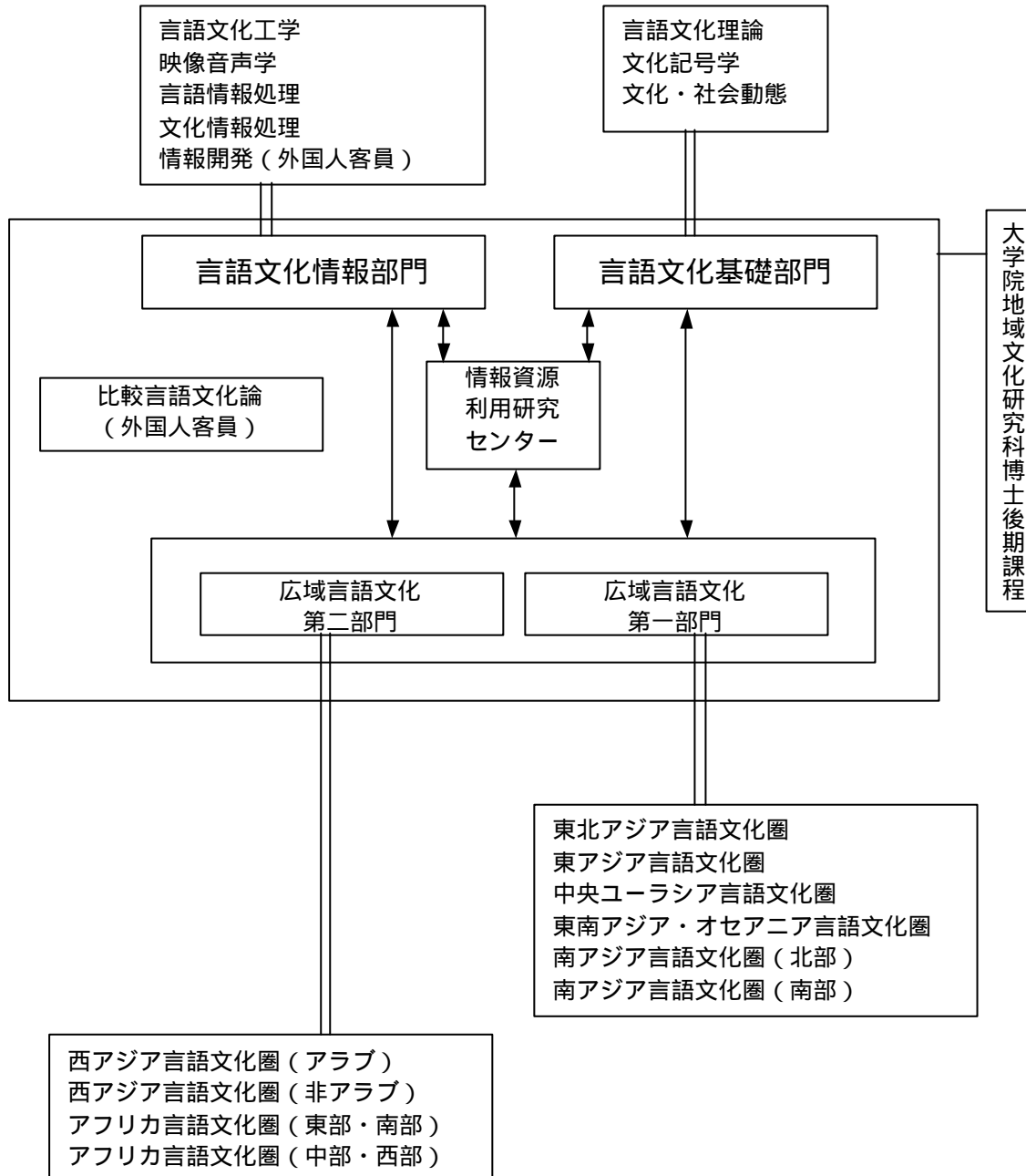
()は外国人客員数を外数で示す



研究組織構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	町田(センター長/併任), 松下, 家島飯塚, 真島, 峰岸呉人
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発(外国人研究員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, および情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷, 中嶋, 中見, パースカララオ小田, 菊澤, 深澤 Peter Edwin Hook(外国人研究員)
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア 東南アジア・オセアニア, 南アジア(北部) 南アジア(南部)の各言語文化圏	東はオセアニアより西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人, 物, 情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端, 石井(所長/併任), 新谷, ダニエルス, 内藤, 宮崎 栗原, 西井, 根本, 本田, 森 澤田, 塩原, 床呂
広域言語文化 第二	西アジア(アラブ), 西アジア(非アラブ), アフリカ(東部・南部), アフリカ(西部・中部)の各言語文化圏	西アジア, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	内堀, 小川, 梶, 上岡 黒木, 高知尾, 永原, 羽田 星
比較言語文化論 (外国人研究員 * COE 分)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者(特にアジア・アフリカ諸国)を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	Mory Traoré 清格爾泰, Stanley Herman Starosta, * Ernst Frederik Kotzé
情報資源利用研究センター		アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と, それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進する。	芝野, 高島 豊島, 三尾 吉澤 Tej Krishan Bhatia (外国人研究員)

動態的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究組織構成図



所 員

所長（併任）教授 石井 溥

教 授

池端雪浦：フィリピン近・現代史	クリスチャン・ダニエル：16-20世紀中国史における社会， 経済および技術
石井 溥：南アジアの人類学	高島 淳：言語情報処理，ヒンドゥー教
内堀基光：東南アジア(マダガスカルを含む) 民族学、宗教人類学	内藤雅雄：インド近・現代史
小川 了：国家とインフォーマルエコノミー (アフリカ)	中嶋幹起：東アジアの諸言語
加賀谷良平：音響音声学，アフリカ諸言語	中見立夫：内陸・東アジアの国際関係史
梶 茂樹：バンツー諸語，言語人類学	ペーリバースカラーオ：南アジア諸言語，音声学
上岡弘二：イラン諸語，イスラムの民間信仰	町田和彦：ヒンディー語
芝野耕司：マルチメディア・データベース論， 多言語処理論	松下周二：アフリカの言語
新谷忠彦：言語哲学	宮崎恒二：オーストロネシア諸社会の研究
	家島彦一：インド洋・地中海の海域史に関する 基礎的研究

助 教 授

飯塚正人：イスラーム学	羽田亨一：サファビー朝文化史研究
小田淳一：計量文献学	深澤秀夫：マダガスカルを中心とするインド洋海域 世界の社会人類学
菊澤律子：オーストロネシア諸言語	本田 洋：韓国・朝鮮の人類学
栗原浩英：ヴェトナム現代史	真島一郎：西アフリカの人類学，フランス帝国 主義史，情報社会学
黒木英充：東アラブ近・現代史	三尾裕子：東アジアの人類学
高知尾仁：世界表象と象徴性	峰岸真琴：オーストロアジア諸言語
豊島正之：中世日本語文献学	森 幹男：インドシナ比較文化史
永原陽子：南部アフリカの歴史	
西井涼子：東南アジア大陸部の人類学	
根本 敬：ビルマ近・現代史	

助 手

呉人徳司：言語学，チュクチ語	床呂郁哉：東南アジア島嶼部の人類学
澤田英夫：ビルマ語・カチン系民族言語の文法体系	星 泉：チベット語
塩原朝子：インドネシア諸語	吉澤誠一郎：中国近・現代史

運営委員・専門委員

運営委員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第18期(1999.2-2001.1)の運営委員は現在以下のとおりです。

飯塚正人 所員	田中二郎 京都大学教授
石井米雄 神田外語大学長 (京都大学名誉教授)	谷 泰 大谷大学教授
池端雪浦 所員	土田 滋
梅田博之 麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	富盛伸夫 東京外国語大学教授
應地利明 京都大学教授	橋本 勝 大阪外国語大学教授
小川 了 所員	町田和彦 所員
久馬一剛 滋賀県立大学教授 (京都大学名誉教授)	間野英二 京都大学教授
古賀正則 明治大学教授	三尾裕子 所員
齋藤信男 慶応義塾大学教授	三谷恭之 東京外国語大学教授
斯波義信 国際基督教大学教授	峰岸真琴 所員
未成道男 東洋大学教授	宮岡伯人 大阪学院大学教授
	宮崎恒二 所員
	宮本正興 大阪外国語大学教授

専門委員

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。2000年度の委員は以下のとおりです。

研修委員会

梅田博之 麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	清水克正 名古屋学院大学教授
大江孝男 東京外国語大学名誉教授	富盛伸夫 東京外国語大学教授
大束百合子 津田塾大学名誉教授	橋本 勝 大阪外国語大学教授
小澤重男 東京外国語大学名誉教授	三谷恭之 東京外国語大学教授
柴田紀男 天理大学教授	宮岡伯人 大阪学院大学教授
	宮本正興 大阪外国語大学教授

卓越した研究拠点（COE）

アジア・アフリカ言語文化研究所は、平成7年度より文部省によって卓越した研究拠点（Center of Excellence，略称COE）に指定され、従来にもまして学術的な研究において先導的な役割をになうことが期待されるようになった。具体的には、「中核的研究機関支援プログラム」により、様々な研究事業を展開している。本研究所では、このプログラムによる事業の重点を、学術研究の情報化と国際化とに置きながら進めている。

情報化の側面では、昨今の高度情報化社会におけるインターネット等の新たな環境に対応した研究資料や研究成果のデジタル化による公開という側面に力を注いでいる。例えば、平成9年度には「先導的研究設備費」により「言語文化研究支援音声・画像信号等変換システム」を導入し、アジア・アフリカ地域の諸言語および文化に関して研究者が収集してきた音声と画像資料のデジタル化を進めている。また、「研究高度化推進経費」では、これまで平成7年度から9年度まで「アジア・アフリカ諸民族の画像・音声・テキスト・データベースの基礎的研究」を行った。平成10年度からは3年計画で同経費によって「アジア・アフリカ言語文化に関する電子事典の構築」を開始している。これらの研究では、言語学・歴史学・人類学の諸分野において蓄積されてきたフィールド資料（テキスト・音声・画像など）をデータベース化し、インターネットを通して公開する事業を推進中であり、このことによって、アジア・アフリカ地域のこれらの分野の研究に従事する国内外の研究者に良質かつ最新のデータを提供することが可能になってきている。

国際化という面では、「国際シンポジウム開催経費」によって、国内外の先端的な研究を行っている研究者を招へいして、国際シンポジウムを開催している。平成8年度には「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」（8年12月3日-5日）、平成10年度には「音調の通言語的研究」（10年12月10日-12日）、平成11年度には「南アジアにおける言語接触と収束的発達」（11年12月6日-9日）を開催した。今年度は「音韻の通言語的研究」（12年12月12日-14日）の開催を予定している。また、「外国人研究員経費」により、主に情報化の専門知識を有する国外の優秀な研究者を招へいし、所員との間で共同研究を進めることによって、研究の情報化・国際化を推進している（招へいされた研究者名については、24頁参照）。

もちろん、こうした情報化や国際化に関わる事業については、この方面の専門家のサポートが欠かせない。このため、平成7年度から「COE非常勤研究員経費」によって専門知識を有する若い研究者の助力を得ている。今年度は、菅原純・榮谷温子・小林正人・永崎研宣の4名が在籍している。これらの非常勤研究員は、それぞれの研究テーマに基づく個別研究を進めていくと同時に、ネットワーク環境の整備、研究所のホームページ作成および維持管理、データベース構築の支援、国際シンポジウム開催のサポートなどの研究所全体の事業に関わる任務を負っている。

以上がCOEとしての研究事業の概要である。本研究所は、今後もますます先導的な研究拠点として、最新かつ高水準の研究資料や成果を国内外に向けて広く発信し、言語学・歴史学・人類学・情報学などの分野の研究の進展に大きく貢献することをめざしていく。

情報資源利用研究センター

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所附属情報資源利用研究センター (Information Resources Center / TUFs, 略称 irc-TUFs) は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、10年の時限で、平成9(1997)年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ入力し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論分析をおこなうとともに、歴史的・民族的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。言語データとしては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語、満洲語等が蓄積されつつあり、これと並行して、デーヴァナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングル、モンゴル、西夏などのプリントアウト用文字フォントが作成され、利用に供されてきました。

3. 10年の活動

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(a) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備が緊要です。

(b) 国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(c) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系(スクリプト)混在での input methods, 整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系での input methods とインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. デジタル言語文化館

センターの研究活動の成果は、世界に向けて開かれていなければ無意味です。このため、センターは、「デジタル言語文化館」を構想しています。「デジタル言語文化館」は、当面はwww(HTTP)で訪問・利用できる形で提供されますが、媒体には拘束されません。

「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方がおこなえるところが、従来のデジタルライブラリ(電子図書館)発想を包含しつつ、それを越える点です。

5. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主体的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。



元宵節の夜

農曆(伝統的な太陽太陰曆)で正月十五日、つまり新年最初の満月の晩は、元宵節である。台湾各地では、盛大な祭りが繰り広げられる。あらゆる廟からそれぞれの神像を荷ったみこしが出るほか、けたたましい爆竹の音が耳をつんざく。仏具商の同業団体は「天下第一軍師諸葛亮孔明」と書かれた山車を走らせ、それらしい扮装の人物も登場する。たぶん、孔明のもつ扠子(ほっす)が仏具の一種だから、仏具商の出し物となるのだろう。

(中華民国台東市。1999年3月2日。吉澤誠一郎)

歳 出

国立学校特別会計

(単位：千円)

区分	平成 8 年度	平成 9 年度	平成 10 年度	平成 11 年度
(項) 研究所	863,070	907,919	946,149	980,643
人件費	624,841	641,364	661,809	688,204
物件費	238,229	266,555	284,340	292,439
(項) 施設整備費		59,500	37,715	
(項) 国立学校			4,637	6,941
(項) 産学連携等研究費			162	2,220
計	863,070	967,419	988,663	989,804

科学研究費補助金受入状況

(単位：千円)

区分	平成 8 年度		平成 9 年度		平成 10 年度		平成 11 年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
国際学術研究	6	56,000	4	38,170	6	59,900		
基盤研究(A)	1	2,300	1	4,600			8	71,100
基盤研究(B)	2	4,500	1	900	1	1,000	2	11,000
基盤研究(C)	1	1,100	3	4,600	2	2,400	1	1,900
奨励研究(A)	2	1,800	1	1,400	2	1,900	3	3,400
特定領域研究(A)							1	1,400
計	12	65,700	10	49,670	11	65,200	15	88,800

奨学寄附金受入状況

(単位：千円)

区分	平成 8 年度		平成 9 年度		平成 10 年度		平成 11 年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
奨学寄附金	2	5,440	2	3,510	2	3,367	3	6,169

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約 400 点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996 年度からは、限られた予算のなかで、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するため、新たに重点プロジェクトというカテゴリーが設けられました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997 年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また 2000 年度からは「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。

重点共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹 / 所員 15, 共同研究員 41)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調(tone)を中心とする超分節素(suprasegmentals)の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツ系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアチア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| (1) 声調 (正確にはピッチ) の音声学的特性 | (5) 声調言語とアクセント言語との違い |
| (2) 子音、母音といった分節素との関係 | (6) 世界の声調言語のタイポロジー |
| (3) 個々の言語における声調の体系 | (7) 声調の通時的变化と比較研究 |
| (4) 声調の語彙的、文法的機能 | (8) 声調の発生と消滅 |

池田 巧	生駒美喜	石 峰	市田泰弘	伊藤英人
岩田 礼	上田広美	上野善道	遠藤光暁	大江孝男
岡崎正男	加藤昌彦	久保智之	窪園晴夫	熊本 裕
坂本恭章	清水克正	清水政明	鈴木玲子	壇辻正剛
角田太作	中井幸比古	中西裕樹	中野暁雄	長尾美武
長野泰彦	新田哲夫	林 徹	早田輝洋	原口庄輔
平山久雄	福井 玲	堀 博文	前田 洋	松村一登
松森晶子	箕浦信勝	藪 司郎	湯川恭敏	米田信子

SMITH, Donna M Erickson

アジア・アフリカにおける政治文化の動態（主査：栗原浩英 / 所員 19, 共同研究員 11）

21世紀を目前に控えた今日、地球社会は「グローバル化」を求める言説に席卷されている観がある。規制緩和と公正な市場競争によって個人の努力が正当に報われる社会を実現しようという主張である。だが現実には、競争から脱落する不幸な人々の群れが目につく一方、グローバル化の先にはいかなる未来が待っているのか、明確なビジョンを誰も示し得ずにいる。内外を問わず、ある種の閉塞感が蔓延するゆえんである。

本プロジェクトは、このような閉塞感を打破すべく、アジア・アフリカの政治文化に焦点を当てる。アジア・アフリカはすでに19世紀から植民地化という名の、西欧的体系への規格化・標準化を経験しており、現在進行中のグローバル化に対しても適合と反発、両方の対応を見せている。すなわち、本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの様々な政治文化を多角的に調査・研究することを通じて、一般に流布しているグローバル化の言説を相対化し、地球社会の文化創造のための新たなパラダイムを提示することにある。

この目的を達成するため、本プロジェクトでは6つのサブグループを設置する。（「近代国家機構の形成」「ナショナリズムとインターナショナリズム」「多民族統合メカニズムの比較」「言語共同体と言語政策」「移動と越境」「国家・宗教・市民社会」）。これにより、アジア・アフリカにおける多様な政治文化の成立過程を明らかにし、国家を軸とする画一性と多様性との拮抗関係を探り、国家の枠に収まらない様々な動きや組織の現状を捉えることができると考える。

栗屋利江
芹澤知広
宮本正興

イ ヨンスク
竹村景子

遠藤 貢
田中雅一

佐原徹哉
速水洋子

鈴木 茂
稗田 乃



ヴィクトリア通りのベトナム人商店(1)

オーストラリアへのベトナム人の移住はベトナム戦争の起こった1960年代以降のことで、移住民の中では最も後発の部類に属する。メルボルン近郊では、西のマリブノン Maribymong 市フツクレイ Footscray 地区と東のヤラ Yarra 市リッチモンド Richmond 地区が、ベトナム人居住地の双壁である。ベトナム人の占める割合がヴィクトリア州で最も高いマリブノン市の公式ウェブサイトには、イタリア語、ギリシャ語、漢語、マケドニア語、スペイン語と並んで、ベトナム語のコンテンツも用意されているほどである。

写真はリッチモンドのベトナム人料理店。前を走るメルボルンのシンボルの一つ、黄色と緑のツートンカラーのトラム（路面電車）も、ベトナム語や漢語表記の看板の中ではまた違った趣きを感じさせる。

(2000年3月25日。ヴィクトリア州ヤラ市リッチモンド、ヴィクトリア通りにて。澤田英夫)

一般共同研究プロジェクト

言語文化接触に関する研究

(主査：中嶋幹起 / 所員 5, 共同研究員 29)

東アジアに共生する幾多の民族の言語は、多様性に富み、その長い歴史と相まって、多くの言語資料が集積されている。さらに、近年は、中国やロシアなどの開放政策により、文献資料や学術成果もつぎつぎに公にされつつある。

本プロジェクトは、朝鮮語、満州語、モンゴル語、エベンキ語、漢語、ウイグル語、チベット語、苗語、西夏語、白語などの言語研究者が現地調査での成果を報告し、それぞれの研究について、言語学のみならず、文化人類学、歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ、言語のダイナミクスを探ろうとするものである。

本年度は、目下構築中の西夏語に加えて契丹文字に関するデータベースを中心に研究を進める予定である。

伊藤英人	池田哲郎	鵜殿倫次	大江孝男	太田 斎
大瀧幸子	大塚秀明	菅野裕臣	岸田文隆	喜多田久仁彦
北村 甫	慶谷壽信	坂本恭章	佐々木猛	佐藤 進
佐藤晴彦	高田時雄	津曲敏郎	丁 鋒	富平美波
中川千枝子	西 義郎	花登正宏	樋口康一	藤本幸夫
星実千代	細谷良夫	前川捷三	村上嘉英	

旅と表象の比較研究

(主査：高知尾 仁 / 所員 5, 共同研究員 9)

本プロジェクトは、他者との出会いを提示し、他者の言表と他者世界が表象するものを解釈し、他者文化の持つ多様な意味を構成する旅のディスクールを主要な対象とする。その際、他者言説を生むコンテキストや、他者の自己（自己文化）との距離・差異の構築や、他者表象が持つ価値評価などが問題となると思われる。他者が直接的に語られるという前提への疑問と、他者表象のバイアスと他者についてのディスクールそれ自体が充分に見つめられなかったことへの反省として、近年欧米で飛躍的に研究が進められている旅行記研究に対応して、ここでは、近代ヨーロッパ（ルネサンス以降）の旅のテキストとそのほかの文化の旅のテキストを取り上げるとともに、他者についての多種多様な表象形態や、それに関連した諸理念（例えば、秩序、正義、正統、コスモス）の表象化についても研究の対象とする。従って、本プロジェクトでは、旅論・表象論・他者論とそれらの交差する領域が取り扱われることとなる。このような比較研究によって、エクリチュールを有する文化による、他者と他者のいる場所と時間の配置・配列が明らかにされ、またその文化と他者との関係性（例えば、理想、調和、幻想、混乱、絶望、排除）を提示するディスクールが明らかにされるものと期待される。またさらには、他者に対比された自己（自己文化）のアイデンティティの提示の実体や、文化の普遍性や近代というディスクールについても考察されることが期待される。

浅井雅志	荒木正純	彌永信美	重松伸司	田中純男
難波美和子	西尾哲夫	原 毅彦	渡辺公三	

東アジアの社会変容と国際環境

(主査：中見立夫／所員 4, 共同研究員 31)

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量が多すぎて、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的に実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

赤嶺 守	石井 明	石濱裕美子	井上 治	井村哲郎
江夏由樹	岡 洋樹	尾形洋一	岡本隆司	小野和子
笠原十九司	加藤直人	岸本美緒	楠木賢道	佐々木揚
新免 康	坪井善明	寺山恭輔	中村 義	西村成雄
萩原 守	浜下武志	原 暉之	藤井昇三	細谷良夫
松重充浩	Mark Elliott	毛里和子	森川哲雄	森山茂徳
柳澤 明				

言語文化データベースの研究とCAI開発

(主査：峰岸真琴／所員 5, 共同研究員 10)

本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの言語文化を中心とした情報をデータベース化するための研究と、それを利用して言語文化教育のためのCAI教材を開発することにある。

アジア・アフリカの言語の大部分は、「特殊な」言語と見なされ、極めて限られた学習の機会しかないのが現状である。また、その話されている地理的、文化的な環境を理解するには、言葉による説明よりも、写真や映像にしたものを見たほうが理解が早いものもたくさんある。そのためには画像、映像資料を収集、蓄積し、それを構造化して、いつでも利用可能なデータベースにしておかなければならない。また、それらを有機的に結合して、教育用のCAIソフトを開発するには、一定のノウハウの蓄積が必要である。

本プロジェクトでは、アジア・アフリカ地域の言語と、その文化的環境を対象にして、

- (1)CAI開発の資料となる言語・文化情報資料のデータベース化の理論的研究
- (2)実際のCAIのプラットフォームとなるハードウェア構成の検討
- (3)現実に稼働しているCAI設備の見学、研究
- (4)CAIシステムの製作とその発表、評価
- (5)効果的なプレゼンテーション、ユーザーインターフェースの研究

をおこない、実用的な言語文化に関する自動化研修システムの製作と運用をめざす。

伊東照司	上田美紀	上村隆一	小川英文	加納千恵子
武井直紀	陳 文芷	寺 朱美	深尾百合子	山元啓史

シアン文化圏に関する総合的研究

(主査：新谷忠彦 / 所員 2, 共同研究員 10)

本プロジェクトは、以下の目的をもって共同研究をおこない、必要に応じて研究会を開き、その成果を資料集・論文集として出版する。

- (1)ひとつの複合文化交流圏(シアン文化圏)の解明のための方法論の検討
- (2)シアン文化圏に関する情報収集と現地調査のための準備
- (3)現地調査の報告と成果の検討
- (4)シアン系言語の学習と習得
- (5)文献資料および非文献資料の解読・整理
- (6)基本的文献資料の解読出版

今年度は特に、海外調査の成果に基づく研究発表、及び、シアン語の歴史的文献の解読研究の二点に重点を置いて研究を進める。

飯島明子
鈴木玲子

石井米雄
横山廣子

加藤昌彦
園江 満

加藤久美子
高谷紀夫

加藤高志
前田 洋

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス / 所員 4, 共同研究員 16)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容がおこり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1)西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2)史(資)料の発掘・収集・整理をおこなうことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築をめざす。

なお、本研究所の「歴史・民俗叢書」では、『雲南少数民族伝統生産工具図録』、『四川の考古と民俗』及び『西南中国伝統生産工具図録』を刊行している。

井上 徹
未成道男
塚田誠之
渡部 武

上田 信
武内房司
寺田浩明

上西泰之
多田狷介
林謙一郎

菊池秀明
谷口房男
吉野 晃

岸本美緒
張 士 陽
渡辺佳成



スンバワのおもちゃ売り

風船、凧、ミニカーなど、子どもの気を引くおもちゃを満載したリアカー。おじさんは小学校の前で、授業が終わった子供たちが出てくるのを待っている。

(インドネシア、NTB州、スンバワプサルにて。1998年3月11日撮影。塩原朝子)

多言語共存環境における文字コードと照合 (collation) 系についての研究

(主査：豊島正之 / 所員 6, 共同研究員 3)

アジアの複数の言語・表記系の混在する環境で、多言語共存電子メール・www ページ等を正しく表示し、多言語対照テキストデータベース、対訳辞書などを編纂・検索するためには、文字コードを曖昧さなく運用し、それに基づく文字列操作 (string manipulation)・文字列照合 (collation) をおこなうことは、必須の要素である。にも拘わらず、現状の国際文字コード (符号化文字集合) とそれに基づく計算機システムでは、これらアジアの諸言語の文字列操作・照合に対する配慮が十分でなく、提案されている諸システムも、安定的な運用をおこなうには不十分で、現に、現行の Unicode・ISO/IEC10646-1 に基づく安定運用がおこなわれているシステムは見出し難い。

本プロジェクトでは、こうした現状を打開し、新たに、将来にわたっての安定運用が可能な国際的な提案をおこなうために、下記の 4 点について、現状の問題の明確化と、それに対する対案を提案するための基礎的研究をおこなう。

- (1) 情報交換での識別 (identification) の概念の洗練と、それに基づく符号化文字集合における文字・字体・字形の洗練
- (2) アジアの複数の言語・表記系 (例：タイ、カンボジア、ウルドゥー、ドラビダ、ペルシャ、デーバナーガリー、漢字) が共存する環境で、曖昧さなく運用可能な文字コード (符号化文字集合) の策定、およびその運用方法の策定
- (3) 文字列データに対する基本的な操作 (manipulation) の定義。即ち、文字列に対する基本的な操作である文字検索、「一文字」の削除・追加などについての、実装方法を考慮した定義
- (4) 複数の言語・表記系が共存する環境での、文化的に正統な文字列の整列 (sorting)・照合 (collation) の方法
- (5) 文字列出力 (presentation forms)

平成 11 年度は、本プロジェクトが扱う問題の現状を、参加者それぞれの専門分野について、ネットワーク環境に力点を置いて調査し、それを非専門家にも理解できる形で文書化してネットワーク等で公開する。

池田証壽

太田昌孝

安岡孝一

東南アジアにとって 20 世紀とは何か - 20 世紀東南アジアの思想状況

(主査：根本 敬 / 所員 6, 共同研究員 15)

20 世紀の東南アジア史を概観するという時系列的な問題意識ではなく、東南アジアの歴史に「20 世紀という時代」がもたらした思想状況上の変容を問題にし、それに基づいて東南アジア史の側から見た「20 世紀」の総括を試みるものとする。

その際、以下に掲げる三つの小テーマを設定し、議論を深めることにする。

- (1) 経済思想
- (2) 国民国家形成をめぐる諸問題
- (3) 「前近代」の再解釈

東南アジアの歴史を扱うため、プロジェクト参加者は前近代史研究を含む歴史研究者を中心とするが、そのほかにも東南アジアをフィールドとし、かつ現地の言語と文化に通じている政治学者、経済学者、人類学者および文学研究者にも参加を要請する。

本年度(2000 年度)は、これまで 3 年間計 16 回にわたる研究会での報告と討論をもとに成果の刊行を目指し、プロジェクトを終了させる予定である。

石井和子
小泉順子
土佐桂子

内山史子
齋藤照子
中野 聡

奥平龍二
嶋尾 稔
弘末雅士

川島 緑
杉山晶子
古田元夫

菊池陽子
鈴木恒之
村嶋英治

アジア・アフリカ諸語の電子辞書の構築 (主査：町田和彦 / 所員 17, 共同研究員 12)

本研究所では、1978年にメインフレーム・コンピュータを導入して以来、アジア・アフリカの言語文化に関する多言語多文字のテキストデータを入力・処理して研究成果をあげてきた。また、その課程で蓄積されまたされつつあるアジア・アフリカ諸語の言語データ(テキスト、辞書など)の情報資源は、各専門分野での今後の研究にとっても価値の高いものが多く含まれる。特に本研究所の設置目的のひとつである「アジア・アフリカ諸語の辞典編纂」事業に沿って刊行された各種辞典の資源は、成果として印刷出版されたもの以上に、国内外の不特定多数の研究者・学習者による利用の可能性を秘めている。

しかし、これらの蓄積されてきた情報資源の内容形式・利用形態は、メインフレーム・コンピュータに依存していることが多く、今日のようなネットワークを前提とする研究環境に必ずしも対応していない。そのため利用者の立場から見ると、以下のような使用上の限界や制限が指摘できる。

- (1) マシンの操作に関する専門的知識が必要である
- (2) テキストデータに使用されている文字コードが特殊である
- (3) 研究成果は主にプリンタへの出力を前提にしている

本プロジェクトは、メインフレーム・コンピュータに従来蓄積されてきたテキストを中心とする情報資源のこうした限界や制限を克服して、公開化を前提とするより汎用的な利用に備えることを目的としている。

本プロジェクトが計画している主な研究および作業は以下のとおりである。

- (1) 移植性の高い多言語多文字コードの研究
- (2) データフォーマットの研究
- (3) 入力・点検が未完なデータをチェックし対応する
- (4) 利用形態の研究
- (5) 検索を含む各種ツール類の研究

公開化に関しては、本研究所の情報資源利用研究センターと協力して、利用の条件や形態などを考慮して実施する。その際、著作権の問題には特に留意する。

石川 巖	梅田博之	大江孝男	大原良通	坂本恭章
武内紹人	中野暁雄	永田雄三	奈良 毅	林佳世子
林 徹	星実千代			

歴史的イラン世界に関する研究 (主査：家島彦一 / 所員 4, 共同研究員 12)

この共同研究の目的は、歴史的脈絡でのイラン、すなわち<大イラン(the greater Iran)>という枠組みのなかで、<イラン的要素>とは何かについて、言語・歴史・文化・思想などの総合的な視野のなかで問いかけを試みることにある。具体的な研究方法としては、イスラム世界におけるイラン世界の位置付け、イラン世界と他世界(例えばトルコ・クルド・アラブ・インドなど)との相互関連や差異を考察することによって、イラン的要素の全体像を浮き彫りにしていく。その結果として、われわれが漠然と抱いていた現代及び過去のイラン・イメージについて、その言語・文化・社会の特質や問題を改めて問い直し、イスラム研究に新たな方向を見出したいと考えている。

第一年度目と第二年度は、基本的な問題の設定、各々の共同研究員による事例研究を通して、イラン的要素に関する特質や問題を発見していきたい。特に、第二年度における研究課題として、イスラム以前におけるイラン的要素とイスラム以後のイラン的要素の比較、シーアとイラン的要素との関わりなどについて考察する。第三年度目は、本プロジェクトの最終年度にあたるので、歴史的イラン世界と現代イラン世界との間にみられるイラン的要素の差異と共通性について議論を深めていきたい。なお、本プロジェクトの総括として、2000年秋に、「歴史の中のイラン - その文化・社会の特質 - 」と題して、公開講座の開催を計画している。

今澤浩二	小名康之	川瀬豊子	北川誠一	近藤信彰
清水和裕	寺島憲治	縄田鉄男	間野英二	山内和也
山口昭彦	吉田 豊			

独立後アフリカ諸国における国家と宗教 (主査：小川 了 / 所員 4, 共同研究員 16)

本プロジェクトにおいては、独立後のアフリカ諸国、特に現代において国家と宗教がどのように協調、相克しているのかを記述、分析し、アフリカ各国の将来を展望することを主眼とする。

アフリカ諸国において、伝統宗教、イスラム教、キリスト教は人々の糾合にどのような役割を果たしてきたのか、あるいは果たしていないのか。それらの宗教は新生国家において国民統合に役割を果たしたのか、あるいは国家機構の横暴を牽制する役割に終始しているのか。ひとつの国家のなかでイスラム教徒、キリスト教徒など異なった宗教信奉者が対立することで、国民統合に宗教が阻害要因になっていることはないか。国家の内実が問われ、民主化の実現が急務になっている現在、諸宗教にはどのような機能を果たすことが要請されているのだろうか。原理的に言えば、本来、国家のめざすところと、宗教のめざすところは相矛盾するものである。でありながら、ヨーロッパ諸国、そして日本においても国家と宗教は相互に依存しあうことが歴史的に多かった。アフリカ諸国の国家と宗教の現状を検討し、将来的な動きをも予測する研究をおこないたい。

遠藤 貢	大林 稔	小田 亮	落合雄彦	勝俣 誠
栗本英世	小馬 徹	佐藤 章	嶋田義仁	武内進一
竹沢尚一郎	津田みわ	戸田真紀子	松田素二	吉田憲司
和崎春日				

イスラーム圏における国際関係の歴史的展開 - オスマン帝国を中心に -

(主査：黒木英充 / 所員 5, 共同研究員 21)

本プロジェクトは、イスラーム圏において国際関係がいかに形成され、認識され、発展してきたかを、総合的に研究することを目的としている。その出発点として、600年以上にわたって中東地域の中核部で発展し、また文書資料による情報を豊富に蓄積してきたオスマン帝国を対象に選び、(1)その対西方すなわち地中海・西欧地域に向けて、(2)対北方すなわちロシアに向けて、そして、(3)対東方の中央アジアとイラン、インド洋地域に向けて、そしてさらに可能であれば、(4)対南方のアフリカ内陸地域に向けての、それぞれの国際関係の実態を、時代的な発展過程に留意しながら多角的に論ずる場をつくりだしたい。ここでいう国際関係とは、国家間の外交関係のみならず、その基層をなした人間たちの交流の具体相もふくむ広義のものである。従って、国際条約とイスラーム法の関係、戦争と安全保障、外交団の構成と活動、通関、貿易と関税、巡礼といったさまざまな問題が設定される。これらの課題を、古代西アジア世界もふくめた長期的展望のなかで位置づけ、同時に現代世界の国際関係、とりわけ中東地域をめぐる国際政治に対しても新しい有効な視座を提供できるように検討してゆくものである。

稲野 強	江川ひかり	奥田 敦	小山田紀子	川口琢司
小松香織	佐藤幸男	佐原徹哉	新谷英治	鈴木 董
高松洋一	永田雄三	野坂潤子	羽田 正	深沢克己
堀井 優	堀川 徹	松井真子	三沢伸生	宮崎和夫
山口昭彦				

アル＝アフガーニーとイスラームの「近代」(主査：飯塚正人/所員2,共同研究員17)

イラン生まれのジャマール・アッ＝ディーン・アル＝アフガーニー(1897年没)は、その生涯にアフガニスタン、インド、エジプト、トルコといったイスラーム圏の各地とヨーロッパ諸国を訪れ、19世紀後半以降のイスラーム世界の歴史に大きな思想的影響を与えた革命家である。彼は伝統的イスラーム思想の改革や専制政治の打破など、ムスリム社会内部における変革の必要を唱える一方、各地でヨーロッパの侵出に対するムスリムの団結(パン＝イスラミズム)を説いて回った。エジプトのオラービー運動、イランのタバコ・ボイコット運動など、19世紀末に各地で起きた「民族」運動も、彼の存在を抜きにして語ることはできないし、現在イスラーム世界が直面している思想的課題のほとんどはアル＝アフガーニーのもとですでに予感されていたといっても過言ではない。

本プロジェクトは、没後100年を迎えたこの偉大な革命家の思想や足跡、各地における評価などを総合的に分析することによって、最終的にはイスラーム世界における「近代」の意味まで問い直すことをめざす。また、上記目的をより効果的に達成するため、文部省科学研究費創成的基礎研究『現代イスラーム世界の動態的研究』の1-a班「現代イスラームの思想と運動」と緊密に連携しつつ研究を進めていく予定である。

新井政美	池内 恵	大石高志	大塚和夫	帯谷知可
加賀谷寛	粕谷 元	栗田禎子	小杉 泰	小松久男
酒井啓子	富田健次	中田 考	中西久枝	八尾師誠
松本 弘	三木 亘			

東南アジア島嶼部における人の移動 (主査：宮崎恒二/所員3,共同研究員8)

人類史的な観点からみると、人は常に移動と接触を繰り返すことによって、集団の離合集散を繰り返してきた。現に存在する「民族」なども、そのような離合集散の産物といえよう。人の移動は、領域と境界を生命線とする近代の国家体制下では、必然的に制限が加えられてきた。しかし、今日、部分的には資本主義の無境界的浸透とも対応する形で、人の移動は活性化し、国家の枠組みすら齎かしている。

このプロジェクトでは、広い分野、地域を対象として問題領域の設定を試みた重点共同研究プロジェクト『東南アジアにおける人の移動と文化の創造』(1996-1998)の成果を踏まえ、より詳細に個別具体的な設定のもとに、現代における人の移動を文化、とりわけ集団意識の生成・変成過程に注目して、研究を進める。

主たる対象地域であるマレーシアのサバ州は、インドネシア及びフィリピンとの間で人の移動が激しく、集団の構成、意識、生活世界の構築といった諸側面で、様々な方向性や動きがみられる。このプロジェクトでは、現地調査と並行して研究会を開催し人の移動を文化的側面から解明する。

第二年次の本年度は、人の移動の制度的側面と民族カテゴリーの生成過程に焦点を当てる。

赤嶺 淳	石川 登	伊藤 眞	上杉富之	清水 展
富沢寿勇	長津一史	山下晋司		

活字字体史研究

(主査：芝野耕司 / 所員 2, 共同研究員 11)

目的： 18 世紀に始まった近代活版印刷で用いられてきた漢字字体の変遷を分析することによって、次の点を明らかにする事をめざす。

- (1)いわゆる康熙字典体
- (2)慣用字体
- (3)明朝体の基本設計

また、この研究を通じて、新 JIS コードの代表的字体の決定に学問的根拠を与るとともに、国語審議会での問題となっている漢字字体問題の学問的根拠にも寄与することをめざす。

研究方法： 康熙字典及び 18 世紀以降の活字総数見本帖を収集し、一字毎に字体対照データベースを作成し、このデータベースの検討を通じて、上記の研究目的を達成する。

成果物： 研究成果物は、新 JIS 漢字コードの代表字体に活かすとともに、JIS X 0208 の将来の改正で用いることのできる代表字体の決定の基礎資料とする。個別字体検討資料は、各社での字体設計の基礎資料として用いることができる資料の作成をめざす。また、国語審議会で検討されている表外字の字体検討に対しても、学問的基礎を与えることをめざす。

最終的な報告は、単行本として刊行することも予定する。

石塚晴通	池田証壽	金子和弘	小池和夫	小駒勝美
小宮山博史	境田稔信	鈴木広光	直井 靖	比留間直和
府川充男				

インド洋海域世界に関する発展的研究

(主査：深澤秀夫 / 所員 3, 共同研究員 13)

紀元前数世紀に現れ 8 世紀から確固たるものとなり、インド亜大陸を挟んで東アフリカからアラビア地域と東南アジア地域とを結ぶ交易や移住や巡礼による人と物との移動が生み出した文化・社会的に多元的でありかつ歴史的に重層的なネットワークこそが、インド洋海域世界である。この海域世界は、16 世紀以降のヨーロッパ世界のインド洋への進出とそれに伴う近代世界システムの確立によって破壊されるどころか、それがもたらした植民地化や奴隷制や契約移民制は新たな人々の出会いを促進し流動性を高めまた居住地域を拡大した結果、その多元性と重層性をより一層複雑化させると共に動態的な性格を加速することとなった。それゆえ、インド洋においては、ブローデルの『地中海』や A・リードの『交易時代の東南アジア』に示された包括的かつ微視的な歴史学の視点がとりわけ有効性を持つものである。

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会の研究の成果をインド洋海域世界の歴史的成立とその展開の通事的研究に導き入れることおよびその通事的視点を共時的な個別文化・社会研究に導き入れることにより相互の研究を深化させることの可能性を、歴史学・言語学・人類学はもとより考古学・技術史・栽培植物学などの学際的視点から討議を重ねてゆくことを目標として措定している。さらに、多元的かつ重層的に形成・展開されてきたインド洋海域世界についての考察は、局所的な地域研究に寄与するのみならずグローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し具体的なモデルを提示することあるいは国民国家・領域国家とは異なる組織のモデルを提示することをも招来するものである。

本プロジェクトの成果は、フィールドワークに基づいたインド洋海域世界の個別文化・社会についての記述的なモノグラフおよびインド洋海域世界像に迫る論考集あるいは画像集として公開してゆく予定である。

秋道智彌	飯田 卓	門田 修	川床睦夫	崎山 理
杉本星子	高桑史子	田中耕司	富永智津子	花淵馨也
堀内 孝	松浦 章	森山 工		

アジア・アフリカにおけるジェンダーとセクシュアリティ

(主査：内堀基光 / 所員 5, 共同研究員 8)

人類社会における性と性差の問題へのアプローチに関しては、ジェンダーとセクシュアリティという二つの用語で代表される関心のあり方の差異がある。この共同研究では、広くアジアとアフリカの諸社会を見渡しつつ、ジェンダーとセクシュアリティの社会的編制や性的イメージの構成について、国家および地域的・家内の経済といったマクロな規制とミクロな対面行動の架け橋あるいはバトルフィールドとなる議論を展開し、これまでの人類学的研究から歩を進める。

足羽與志子
速水洋子

河合香史
松園萬亀雄

栗田博之
牟田和恵

菅原和孝

沼崎一郎

社会空間と変容する宗教

(主査：西井涼子 / 所員 7, 共同研究員 8)

人類学においては個人対社会、主観対客観といった二項対立的な問題設定を前提としていることが多い。この共同研究プロジェクトは、こうした前提を超えて、いかに人々の経験のリアリティを捉えることができるのかについての、人類学的な理論的展望をひらくことを目的とする。ここでいう社会空間とは、主体の実践のスペース、もしくは実践において他者と相互作用しつつ構築する社会関係の総体をさす。そこにおいては、実践主体はいかに重層する諸関係とかかわりながら自己を維持し構成するのが問題となる。そこからあらためて、社会的なるものが問われることになる。このような社会科学の中心的ともいえる課題を追求するために、研究会は人類学者を中心としながらも、心理学、社会思想等の隣接分野の研究者の参加をあおぎ、学際的な共同作業による理論の構築をめざす。

本プロジェクトでは、こうした課題を追求するにあたり、宗教といった現象に焦点をあわせることで、個々のメンバーの事例報告の羅列に終わることを避け、より議論を建設的に深めようとする意図をもっている。高度経済成長に伴う大衆消費社会の出現、情報社会化、国際化のなかで、人々は宗教的な実践を多様化、差異化させている。このような宗教、あるいは宗教的なものの経験をとおして、再編成されていく社会関係のあり方を考察することは、社会空間の概念を歴史的文脈において検討することを可能にするものと思われる。

今村仁司
田村愛理

高木光太郎
土佐桂子

高崎 恵
當眞千賀子

田邊繁治

田中雅一



タウンシップの子供たち

アパルトヘイト崩壊後の南アフリカで、タウンシップ(都市周辺の旧黒人居住区)は活気に満ちている。子供たちの笑顔は新しい時代の象徴だ。しかし、学校と教師の不足は深刻で、二部授業のため、昼間は学校に行くことのできない子供たちも多い。(ジョハネスバーグ郊外のソウェトにて。1997年3月。永原陽子)

その他のプロジェクト

言語研修

(主査：峰岸真琴 / 所員 8, 共同研究員 5)

言語研修委員会は、その分野に精通する研究者によって構成され、アジア・アフリカの言語に習熟し、実際に役立つ能力を高める最も効果的な方法を検討することを目指している。

短期集中言語研修の目標は、

- (1) 口語および書き言葉の能力をつける
- (2) 言語の科学研究と実際の応用の訓練の提供
- (3) 大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助

専門委員会が年 2 回、専門委員・共同研究員合同会議が年 1 回開催され、研修言語の選定、教授法、開催時期・期間、実施方法、評価等について討論する。

桜井 隆

長野泰彦

森 茂男

森安孝夫

吉川武時



ヴィクトリア通りのベトナム人商店(2)

メルボルンの台所とも言えるヴィクトリア・マーケットからヴィクトリア通りを東に向かい、鉄道高架の下をくぐってリッチモンド地区に入ると、町の景観は一変する。サイゴンの同名市場を模したというバンタン市場を中核にしたエリアの、通りの両側に並ぶベトナム・中華・ラオスなどの料理店の数の多さはヴィクトリア州全体でも有数である。写真は中国系ベトナム人経営の料理用品店。この店に限らずベトナム人商店の名前は、同じ語を2つ重ねにしたのが結構多い。

(2000年3月25日。ヴィクトリア州ヤラ市リッチモンド、ヴィクトリア通りにて。澤田英夫)

外国人研究者の招へい

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この4年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

(*はCOE外国人研究員、 は客員以外の研究員)

1997	Geetanjali Pandey	インド	現代インド史、ヒンディー文学
	Abhi Subedi	ネパール	文学、比較文化
	藤村 靖	日本	音声科学
	Mangantar Simanjuntak	インドネシア	言語学、マレー語学
	Belinda Ancheta Aquino	フィリピン	政治学、フィリピン学
	Gustaaf Houtman	オランダ	社会人類学、宗教人類学
	Keralapura Shreenivasiah Nagaraja	インド	電算言語学、オーストラシア言語学
	* Lars Erik Axel Johanson	スウェーデン	言語学(チュルク語)
	David John Nathan	オーストラリア	応用言語学
	Eva Agnes Csato Johanson	ノルウェー	言語学、チュルク語学
1998	* Apolonia Tamata	フィジー	言語学
	片山素子	日本	言語学、音韻論
	阿孜古麗古力	中国	言語学、言語教育
	沈 靖子	日本	歴史学
	Nasiri Mohammad-Reza	イラン	歴史学
	史 金波	中国	言語学、西夏学
	索 文清	中国	民族歴史学
	Prakya Sree Saira Subrahmanyam	インド	言語学
	Lawrence Andrew Reid	アメリカ合衆国	言語学
1999	Kenneth William Cook	アメリカ合衆国	認知及び応用言語学
	John Gongwe Kiango	タンザニア	語彙学、辞書編纂学
	* Didier Louis Nadia Goyvaerts	ベルギー	言語学
	Mory Traoré	コートジボワール	実践演劇論、芸術社会学
	清格爾泰	中国	言語学(契丹語研究)
	Stanley Herman Starosta	アメリカ合衆国	言語学
	Peter Edwin Hook	アメリカ合衆国	印欧言語学、言語類型学
	Tej Krishna Bhatia	アメリカ合衆国	言語学
	Andrew R. Hall	アメリカ合衆国	東アジア史
2000	* Ernst Frederick Kotzé	南アフリカ	アフリカーンス語

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

外国機関名（略号） / 締結年 / 国名

国立科学技術研究機構（ONAREST）
（現・高等教育・情報科学・科学研究省(MESIRES)）
1978. カメルーン

文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」（1969-76）におけるカメルーンとの共同研究を経て、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長を招へい、本研究所で協定締結(1978)。所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86)：カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91)：本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本 8 冊(African Languages and Ethnography シリーズ) 論文 1 点(Sudan Sahel Studies 所収)。

チベット言語文化研究所（LCAT）

1988. フランス

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが、その一部の KWIC 索引は、*Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique* として、フランス国立図書館から 1990 年に出版された。

人文科学研究所（ISH）1988. マリ

文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を *Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires, Vol.1.(1988), Vol.2(1990), Vol.3(1992)* として刊行した。

インド諸語中央研究所（CIIL）1987. インド

CIIL 所長本研究所訪問(1983)、副所長来訪(1985)、所員来所、共同研究(1984-85, 1991-92)：本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92)：共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施、共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。

農業計画・経済研究センター（CAPES）

1996. イラン

国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」の実施を契機に、将来幅広くイラン文化と日本文化に関する共同研究プロジェクトを組織する目的で研究協力協定が締結された。両研究機関の共同研究員に、研究員と同等の便宜と援助をおこなうことになっている。

インド統計研究所（ISI）1987. インド

ISI 特別客員研究員本研究所来所、共同研究(1985-86)、経済研究部長来訪(1988)：本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91)：共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987-)：電算資料シリーズ 3 冊発行(1987, 88, 90)。

情報文化省文化研究所（IRC）1997. ラオス

「シャン文化圏」プロジェクトを円滑に進めるため、ラオスとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことを重要な研究課題のひとつにしています。過去5年間に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究・海外学術調査＝平成11年度から海外学術調査）で、本研究所員が組織した研究は以下のとおりです。

- 1) アフリカにおける「音文化」の比較研究(1995-96, 川田順造)
- 2) 東アジアにおける情報伝達と人間移動 - 南北の比較研究 - (1995-96, 中嶋幹起)
- 3) 南部アフリカ地域の諸言語の言語学的記述・比較研究(1995-96, 加賀谷良平)
- 4) イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究(1995-96, 家島彦一)
- 5) シャン文化圏における言語学的・文化人類学的調査(1996-98, 新谷忠彦)
- 6) 南インド・タミル地域の社会経済変化に関する歴史的研究(1997, 水島 司)
- 7) インド諸言語のための機械可読辞書とパーザの開発(1997-98, ペーリ・パースカララオ)
- 8) イスラム圏における交通システムの歴史の変容に関する総合的研究(1998-99, 家島彦一)
- 9) 東南アジア島嶼部における国際移動に関する文化人類学的研究(1998-99, 宮崎恒二)
- 10) 東アジア沿海地域における民俗文化再生過程の人類学的研究(1998-99, 三尾裕子)
- 11) 北部中央バントゥ諸語の記述・比較研究(1999, 加賀谷良平)
- 12) アジアの文字と出版・印刷文化及びその歴史に関する調査研究(1999, 町田和彦)
- 13) 中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究(1999, 新免 康)
- 14) マダガスカルにおける民族集団の生成論理と民族間関係(1999, 内堀基光)
- 15) サラワク先住諸民族社会における自然環境認識の比較研究(2000, 内堀基光)
- 16) 南アジア諸言語に関する基礎語彙・文法調査(2000, ペーリ・パースカララオ)

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じた東西の文化的・経済的交流 - インド洋周辺の港市遺跡の調査 - 」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87)などがその一部です。

「海外学術調査に関する総合調査研究」(通称「総括班」)の活動

科学研究費補助金(以下「科研費」という)を受けている「総括班」は、本研究所所長を代表者とし、他のさまざまな機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局を置いて、科研費にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と日本学術振興会との情報交換、連絡調整などの活動を行っています。

活動の主なものとしては、科研費で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換をおこなう「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニュースレター』の出版があります。

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の習得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計34名が派遣されました。

1967-69	石垣幸雄(エチオピア), 守野庸雄(タンザニア)
1969-71	松下周二(ナイジェリア), 家島彦一(アラブ連合)
1971-73	内藤雄雄(インド), 中野雅雄(モロッコ, 南イエメン)
1973-75	福井勝義(ソマリア), 中嶋幹起(香港)
1975-77	加賀谷良平(ボツワナ), 湯川恭敏(タンザニア, ザイール)
1977-79	石井 溥(ネパール), 藪 司郎(ビルマ)
1979-81	羽田亨一(イラン, トルコ), 清水宏祐(アラブ連合, イラン, トルコ)
1981-83	山本勇次(ネパール), 新谷忠彦(ニューカレドニア)
1983-85	辻 伸久(中国, 香港), 水島 司(インド)
1985-87	中見立夫(中国, モンゴル), 梶 茂樹(ザイール, ケニア, ザンビア)
1987-89	松村一登(フィンランド, ソ連), 宮崎恒二(オランダ, インドネシア)
1989-91	林 徹(中国, トルコ), 栗本英世(エチオピア, ケニア)
1991-93	栗原浩英(ベトナム, ロシア), 峰岸真琴(インド)
1993-95	新免 康(中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬(イギリス, タイ)
1995-97	飯塚正人(エジプト, イギリス), 黒木英充(シリア, フランス)
1997-99	吉澤誠一郎(フランス, イギリス, 中国, 台湾), 西井涼子(タイ, イギリス)
1999-2001	澤田英夫(オーストラリア, インド), 本田 洋(韓国, イギリス)



南タイのマノーラーによる治療儀式

マノーラーは、南タイのキンナラー(半島半人)を型どった衣装をつけた踊りを伴う伝統芸能である。熟練したマノーラーの踊り手は超自然的力がそなわるとされ、治療儀式も行なう。また、人々は願かけをマノーラーに託して行い、それがかなうと衣装や面をつけて踊ることでお礼参りをする。お礼参りの会場となっている寺の境内は、蒸し暑さとひしめく人々の熱気で、立っただけで汗が流れた。写真は、これから右端にみえる赤ん坊の頭を、熟練したマノーラーの踊り手が足の裏で踏もうとしているところである。こうすることである種のおできを治療することができる信じられている。(南タイ、ソンクラーク県にて。1999年5月5日。西井涼子)

短期共同研究員（公募）

1978 年度より，共同研究プロジェクトとは別に，本研究所において一定期間（2000 年度の場合，1 週間以上 3 カ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国語大学では，多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し，かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と，国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために，言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を 1992(平成 4)年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく，本研究所に大学院委員会を設置し，20 名（2000 年度）の教官が参加し，言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ，教育活動に従事することとなりました。

研究生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは，審査の上，研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し，指定の教官の指導を受けます。



魚獲り

乾季も終わりに近づき池や沼の水も減った 8 月や 9 月，男はヤス，女は笠状の籠や網を使い，泥だらけになりながら獲物を追い回す。獲れるのは，小魚にゲンゴロウ，時に亀。晩のおかずにしかならないが，農閑期の楽しい一時。

（マダガスカルのマジュンガ州北部にて。1984 年 9 月。深澤秀夫）

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修期間は150時間です。最近、言語研修を実施した言語は、次のとおりです（2000年実施決定を含む）。

23 頁参照

研修言語名（修了者数）

年度	東京会場	関西会場
1981	ヒンディー語(8)、パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12)、ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12)、フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12)、ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14)、カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5)、タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10)、タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシャ語(10)、トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20)、ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11)、インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12)、ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12)、アラビア語エジプト方言(15)	フィリピノ語(12)
1993	朝鮮語(17)、グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語(9)、ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(5)、チベット語(25)	上海語(12)
1996	タイ語(14)、現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1997	テルグ語(10)、モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1998	アイヌ語(2)、ハヤ語(11)	カンナダ語(5)
1999	フィジー語(4)、ペルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
2000	シャン語(), アフリカーンス語()	ペルシア語()

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して、より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として、科学研究費補助金による支援を受けつつ、言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム（CAI）化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は、研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく、必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営することにより、増大し、多様化する社会要請に応えることをめざします。

電算機室

本研究所の電算機室では，1978年にメインフレーム・コンピュータを導入して以来，何代かの世代交代を経て，現在は HITAC M-640 システムが主機となっています。このシステムは，アジア・アフリカの言語を対象にした自然言語処理の目的に沿って，構成されています。たとえば，非ラテン・非漢字系の文字体系を扱うための文字フォントの作成，これらの文字フォントが利用できるエディタによるテキスト入力，画面表示・印刷のための出力，などの処理が可能です。また，ユーザーの研究目的に応じて，インデックスの作成や辞典編纂，データベースの編成，テキスト分析などのための各種ユーティリティー・ソフトウェアが準備されています。



情報資源利用研究センター

現在は，1997年4月より本研究所に情報資源利用研究センターが設置されたことにより，コンピュータ処理の対象が，従来のテキスト中心から，音声・静止画・動画をも含んだマルチメディアに移行しつつあります。センターの目的のひとつは，研究成果の促進や新しい研究手法の開発の基盤整備のために，アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源を有機的に統合し構築することです。



そして，構築された情報資源をインターネットなどのネットワーク環境で，外部に公開することを目指しています。この目的のために，高性能ワークステーションの導入や，大容量のデータを加工・保存・管理できるハードウェア・ソフトウェアの導入を積極的に進めています。

9-10 頁参照

図書室

日本における唯一の、大学附置の人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964（昭和 39）年の創設以来収集してきました。

この間、民族の独立、対象地域の複合化、研究手段の高度化等、当該地域に関する研究の諸条件は大きく変化してきました。この現況を考慮しつつ、内外の研究機関、大学等より参集する共同研究員等の需要に応えるため、多様な資料を収集しています。海外研究機関（約 50 カ国、150 機関）との寄贈・交換による資料をも継続的に収集しています。また、本学の教職員、大学院博士後期課程在籍者に対する貸出しや本学の学生およびその他の機関、他大学の教官、学生に対する閲覧サービスもおこなっています。

2000（平成 12）年 3 月末現在、蔵書（備品資料）の総数は 91,432 冊、マイクロフィルム 10,020 リール、マイクロフィッシュ 31,390、雑誌は約 1,150 タイトル等です。蔵書のなかには、アジア・アフリカ等諸地域の教科書をはじめ、世界各国語の聖書、イランの主要新聞（19 世紀末-1970 年のマイクロフィルム：65 種）、ベンガル語文芸雑誌（19 世紀創刊：5 種）のほか、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第 2 版」、19 世紀「カイロ石版画集」、晩清（中国）製糖画集、トリピタカ（カンボジア語版・南伝大蔵経）等々、他の研究機関には見られない貴重な資料が所蔵されています。

また外国雑誌の収集には、特に留意し、欠号補充等の努力を続けています。

なお、本研究所には現在、下記 5 種の文庫があります。

山本文庫：1967（昭和 42）年受入

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920-1965）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計 598 冊）を含む。

郎氏（1905-1987）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計 1,671 冊）を含む。

前嶋文庫：1986（昭和 61）年受入

わが国におけるイスラム研究の創業者の一人である故前嶋信次氏（1903-1983）の個人蔵書のうち、和漢書 1,272 冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

浅井文庫：1970（昭和 45）年受入

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井恵倫氏（1895-1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類・雑誌等（和・洋書計 870 冊）をはじめ、台湾原住民関係の貴重な言語資料、ニューギニアの民族写真その他（アルバム、ノート、原稿、書簡、直筆辞書、単語カード、未発表の高砂族伝説集索引カード等）を含む。

王文庫：1993（平成 5）年受入

著名な台湾言語学者、故王育徳博士（1924-1985）の個人蔵書で、台湾の言語学、文学、歴史、政治関係の諸文献を中心にしたコレクションである。歌仔戯、1950 年代から 1980 年代にかけて日本で展開された台湾独立運動家が発行した雑誌やパンフレット、台湾で発行された党外雑誌や王博士の手稿など貴重なものを多数含む。（和・中・洋書等計 3,163 点）。

小林文庫：1976（昭和 51）年受入

著名なモンゴル史研究者である故小林高四

音声学実験室

音声学実験室には、音声言語の性質・特徴や発話の調音状態を観察し記録するために次のような機器が用意されています。

パーソナルコンピュータを用いた音声分析プログラムでは、音声の各時点ごとの構成周波数の変化や強さを濃淡模様で表示するスペクトログラムや基本周波数の抽出ができます。スペクトログラムでは従来の機械式のそれと同様に用途に応じてワイド・バンド、ナロー・バンド、セクション、音圧の表示ができるうえに、基本周波数を連続的にプロットして表示することもできます。基本周波数測定は測定したい範囲を音声波形上に指定してもできますが、スペクトログラム上の範囲指定もできますので、基本周波数と音節との対応が容易になります。もちろん、各時点ごとの測定値も表示できます。画面の時間表示も自由に変わることができますので、数値にわたるピッチ変化のようなデータも、また音節内のピッチ変化のような詳細な測定を要するようなデータも画面に表示できます。1 サンプルの最大録音時間はサンプリング周波数やコンピュータのメモリーによって異なりますが、現在のシステムでは10kHzを上限とする測定(20kHz サンプリング)のためのデータで最大約10分間可能です。さらに、ある音声データを他の音声データの任意の部分に付加したり、またある音声データからその一部を切り取ったりすることも可能ですし、音声データの特定の部分のみを繰り返し聴取することもできます。

エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を観察し記録するための機器です。32 個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、各時点ごとの電極と舌との接触状態を、前面パネルに口蓋状に配列したランプの点滅で示してくれます。もちろん、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、ビデオテープ編集機やカセットテープを高速に複製するテープ・デュプリケーターが、フィールド調査で録音されたテープの複製作成や言語研修用テープの作成のために用意されています。また、良好な条件での発話資料を録音するために、防音室や各種のテープレコーダーも用意されています。

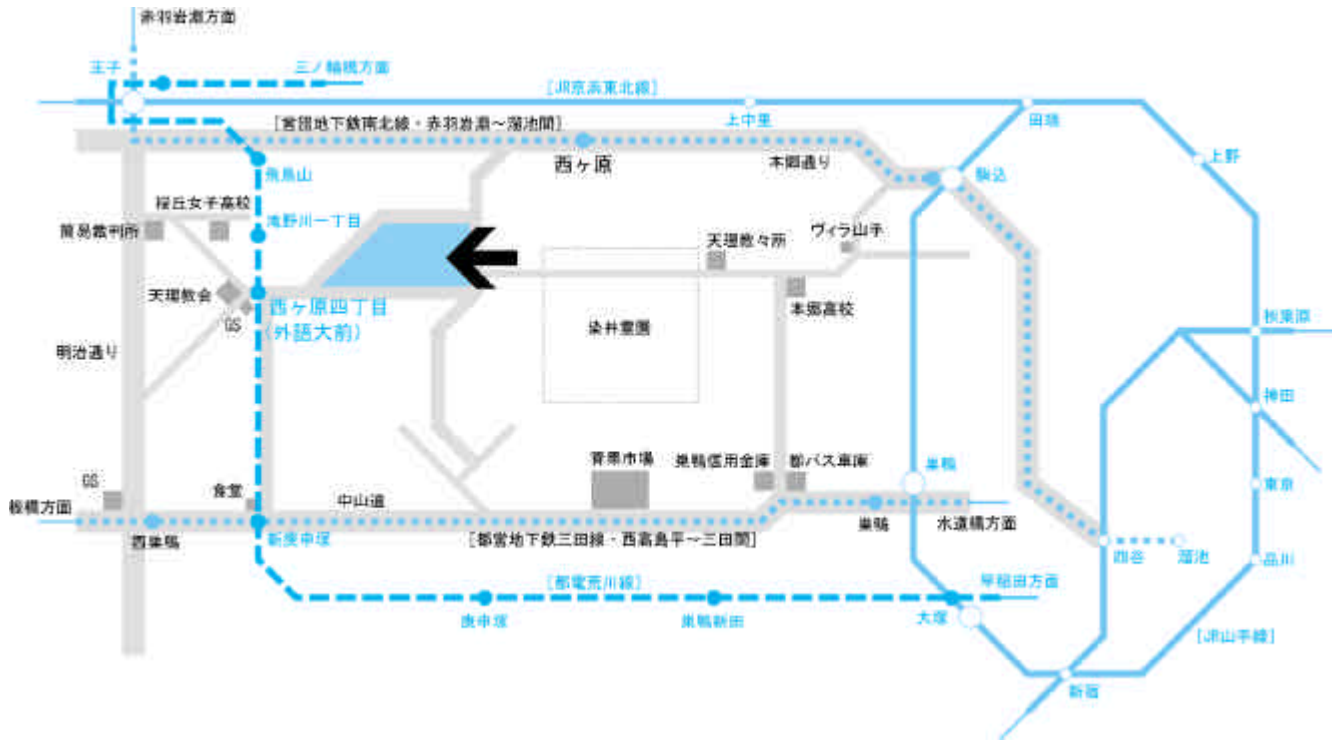
附属施設の音声・言語研修資料室には、フィールド調査で収集された世界の珍しい言語や貴重な民話、民族音楽などのテープやレコードをはじめ、これまでの言語研修テキストのテープ、アジア・アフリカ地域の諸言語の語学テープとレコードが整理・保管されていて、研究者の利用の便を計っています。

アジア・アフリカ言語文化研究所のホームページのお知らせ

本研究所では平成6年度からホームページを開設しています。
本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細、研究成果の出版物一覧など、最新の情報を提供しています。どうぞご覧ください。

ホームページのアドレス：<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

交通案内



交通機関

1. 【JR・都電荒川線】利用

- (1) JR山手線を大塚駅で下車。都電（荒川線）三ノ輪橋方面行きに乗り換える。
4つ目の西ヶ原4丁目（外語大前）で下車し、踏切を渡る。徒歩約3分。
- (2) JR京浜東北線を王子駅中央口で下車。都電（荒川線）早稲田方面行きに乗り換える。
3つ目の西ヶ原4丁目（外語大前）で下車し、前方左手へ徒歩約3分。

2. 【地下鉄・徒歩】利用

- (1) 都営地下鉄三田線を西巣鴨駅で下車し、徒歩約10分。
- (2) 営団地下鉄南北線を西ヶ原駅で下車し、徒歩約15分。

3. 【JR・徒歩】利用

- (1) JR山手線を巣鴨駅または駒込駅で下車し、徒歩約15分。
- (2) JR京浜東北線を王子駅南口で下車し、徒歩約20分。

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

〒114-8580 東京都北区西ヶ原4丁目51番21号
Tel. 03-3910-9147(代), Fax. 03-5974-3838